

中学校・特別の教科 道徳 | 50 分授業 | 第 1～3 学年対応

『アカとアオ』道徳授業指導案

友だちとはどんな関係か 物語の場面から友情と信頼を考える

対象	内容項目	教材	ICT
中学校 第 1～3 学年	B-8 友情、信頼	『アカとアオ』	朗読音声 + 挿絵提示

1. 本時の構成

導入 3 分、教材提示 10 分、補助発問・揺さぶり・中心発問を軸とした個人思考と対話 27 分、振り返り・終末 10 分

2. 本時の核

中心発問

アカと村人たちの関係は、どの場面で、どのように変わり、深まっていったのだろうか。

生徒それぞれの「友だち」の捉えを出発点に、アカが金を渡したときの村人たちの笑顔をどう考えるかを問い直す。その上で、救助や協働、日常的な交流を通して、アカと村人たちの関係がどのように変わり、深まるかを場面の叙述に即して考える。友情を「物か心か」の二者択一にせず、贈り物をきっかけとする可能性、相手を思う行動、相手の応答、互に関わる時間を重ねて捉える。

3. ねらい

自分たちの友だち観と、場面 6 の金と笑顔についての見方を出発点に、場面 10・14・15 におけるアカと村人たちの行動を比較する。関係が変わり、深まる過程を多面的に考え、友情と信頼について自分自身の言葉で考えを深める。

4. 授業の到達像

- 導入で友だちについて多様な見方を出し、場面 6 の笑顔について判断と根拠を述べる。その後、複数の場面における言動や相手の応答を根拠に、関係の変化を説明する。
- 「贈り物が関係の入口になることもある」「笑顔だけでは相手の気持ちを決められない」など、異なる見方に触れて自分の考えを深める。
- 本当の友だちになるために大切だと思うことを、自分の言葉で表す。

5. 対象学年と発達段階に応じた扱い

本時は第 1～3 学年で実施できる。物語と中心発問は共通とし、全体対話で取り上げる観点と言葉の抽象度を学年に応じて調整する。基本展開は第 1 学年から無理なく扱え、第 2・3 学年では葛藤や相互性をより深く追究する。

学年	主な焦点	深め方	学年別の問い返し例
第 1 学年	助け合いと信頼の始まり	誰が誰に、どのように働き掛けたかを、場面の行動から具体的に捉える。	場面 6 の笑顔について、なぜ友だちになれた／まだなれていないと思う？
第 2 学年	相手の幸せを願う関係	行為の動機、見返りの有無、相手の気持ちへの配慮を比較する。	場面 10 のアカの行動を見て、村人たちの気持ちはどう変わっただろう？
第 3 学年	損得を超える相互的な信頼	一方的な善意の価値と、関係としての友情を区別し、時間や葛藤も含めて考える。	場面 6 から 15 までは比べ、誰のどんな行動によって関係が深まったと言える？

6. 教材観・道徳的価値の捉え

教材の構造

物語には、アカと村人たちとの関係の質が段階的に変化していく仕掛けがある。場面 6 では、金を渡そうとするアカに村人たちが笑顔で近づき、アカの「友達になれた」という理解とアオの警告が対立する。場面 10 では、アカが見返りを求めずに村人たちを救う。場面 14 では、おばあさんをきっかけに村人たちの側からアカへの働き掛けが生まれる。場面 15 では、互いに助け合い、学び合い、遊び合う日常的な関係へと発展する。場面 6 の笑顔の意味を問い直した後にこれらの場面を比較し、関係が変わり、深まる過程を考える。

価値の焦点

- 友情は、互いの人格を尊重し、相手の成長や幸せを願う、対等で相互的な関係である。
- 信頼とは、「必ず期待どおりにしてくれる」と相手に求めることなく、相手の人柄を信じ、必要ときに支え合おうとすることである。
- 贈り物そのものを否定せず、贈る側の動機や見返りへの期待、受け取る側が受け入れるかどうかを選ぶ自由、その後の関係をどのように育むかという視点から吟味する。
- 友情は一瞬で完成するものとは限らず、関係の始まりや深まり、揺らぎを含む過程として捉える。

想定する生徒の実態と難しさ

- 生徒は、「一緒にいて楽しい」「困ったときに助ける」など、経験に基づく多様な友だち観をもっている。一方、相手の笑顔をどう受け止めるか、友だちになるきっかけと関係が深まる過程をどう区別するかについては、意見が分かれると考えられる。
- 「金＝悪、心＝善」と単純化し、物語の教訓を性急に導き出そうとする生徒がいることが予想される。
- 友人関係についての実体験を公に語ることに、不安を感じる生徒もいる。実体験の開示は求めず、架空の事例や「これからの自分」を通して考えてもよいこととする。
- 発言量と考えの深まりは必ずしも一致しない。短文による記述、他者の意見を聞く姿勢、考えの書き換えや書き換えなども見取る。

7. 発問構成

導入（フリ）	今日は友だちについて一緒に考えてみたい。みんなにとって、友だちってどんな関係だと思う？ 隣の人と話してみて。 (友だちにもいろいろあるよね。挨拶から始まったり、一緒に遊んだり勉強したり、本当に困ったときに支え合ったり)
補助発問 A	心を使う、時間がかかるが確かな方法って、なんだと思う？
補助発問 B	アカが村人たちに金を渡したとき、友だちになれたと思う？
揺さぶり	アカが金を渡そうとしたら、村人たちは笑顔で近づいてきたよね？
中心発問（オチ）	アカと村人たちの関係は、どの場面で、どのように変わり、深まっていったのだろうか。
自己への問い	本当の友だちになるには、どんなことが大切だと思う？

8. 事前準備（必須は教材提示とワークシート）

- 必須・教材提示：場面 4 でアカがシロに会う場面から場面 15 までの朗読音声で、1.25 倍速で約 10 分間再生できるようにし、ディスプレイとスピーカーの接続・音量を確認する。

- 必須・配付：ワークシートと、場面 6・10・14・15 の叙述を全員が参照できるようにする。
- あるとよい：場面 6・10・14・15 の画像または本文抜粋、板書用の人物・矢印カードを用意する。
- 予備：通信や機器の不具合に備え、音声を端末に保存し、場面 4～15 の挿絵を印刷しておく。

9. 本時の展開 (50 分)

※導入で友だち観を共有し、朗読後は補助発問 A・B と揺さぶりを経て中心発問を提示する。中心発問の後に個人思考と対話の時間を確保する。

時	段階	生徒の学習活動	教師の働きかけ・主な発問	予想される反応／留意点
0-3 3 分	導入 友だち観を出し合う	「友だちってどんな関係か」を隣の人と話す。 「一緒に遊ぶ」「楽しい」「困ったとき助ける」 「心の支え」など、多様な考えを聞く。	「今日は友だちについて一緒に考えてみたい。みんなにとって、友だちってどんな関係だと思う？ 隣の人と話してみて。」 (友だちの関係性っていろいろあるよね。挨拶から始まったり、一緒に遊んだり勉強したり、本当に困ったときに支え合ったり)	さまざまな関係を挙げる。ここで「本当の友だち」の条件や、物語の結論を教師が定義しない。
3-13 10 分	教材提示 物語を味わう	Scene 4 でアカがシロに会う場面から Scene 15 までの朗読を 1.25 倍速で聴く。画面に映る各シーンの挿絵から、表情・距離・行動・色や雰囲気を感じ取る。 ※Web サイトの事前共有は任意とし、当日は初めて物語に触れる生徒も参加できるようにする。	ディスプレイとスピーカーを用い、朗読音声と同期して自動的に切り替わる Scene 4～15 の挿絵を提示する。教師は説明を重ねず、物語を受け止める時間にする。	注目場面：6＝金と笑顔、10＝子どもを救う、14＝おばあさんが手伝う、15＝助け合い・教え合い・遊ぶ。 挿絵から読み取った印象も後の根拠として認める。
13-17 4 分	補助発問 A 教材の言葉を考える	心を使う、時間がかかるが確かな方法とは何か、物語中のアカの願いや行動と結び付けて個人で考え、短く共有する。	「心を使う、時間がかかるが確かな方法って、なんだと思う？」 教材の前後の言葉を示し、具体的にどんな関わりかを問い返す。	一緒に過ごす／相手を知る／困ったときに支える、など。金を使うこと自体を否定する結論へ急がない。
17-23 6 分	補助発問 B 場面 6 の判断を比べる	場面 6 について「友だちになれた／まだなれていない／始まりかもしれない」などの立場と理由を短く書き、近くの人と比べる。	「アカが村人たちに金を渡したとき、友だちになれたと思う？」 「そう考えたのは、どの言葉や行動から？」	「笑顔で近づいてきた」「金が目的かもしれない」「贈り物がきっかけになる」など、異なる根拠を並べる。二択の正解を決めない。

時	段階	生徒の学習活動	教師の働きかけ・主な発問	予想される反応／留意点
23-26 3分	揺さぶり 笑顔の意味を問い 直す	村人たちの笑顔を、場面6の状況と合わせて捉え直す。友だちだと言える理由、まだ判断できない理由の両方を聞く。	「アカが金を渡そうとしたら、村人たちは笑顔で近づいてきたよね?」「この笑顔はどんな意味だと思う?」	笑顔は関係の入口とも取れるが、その理由を断定できない。次の中心発問へ問いを広げる。
26-40 14分	中心発問（オチ） 関係の変化を考える	中心発問について個人思考3分、小集団での比較4分、全体対話7分を目安に行う。場面6・10・14・15を参照し、選んだ場面と理由、関係がどう変わったかを説明する。考えを変更・追加してよい。	「アカと村人たちの関係は、どの場面で、どのように変わり、深まっていったのだろうか。」 生徒が答えやすいように、どの場面で友だちになったと思うか手を挙げさせる。選んだ理由を話してもらう。	場面6＝関係の入口／10＝見返りを求めず救う／14＝村人側も動き出す／15＝日常を共にする。特定の場面に収束させず、複数場面のつながりを根拠にする。
40-47 7分	振り返り 自己を見つめる	「本当の友だちになるには、どんなことが大切だと思う?」への自分の考えを書く。 ★☆☆：考えを一つ書く ★★☆：理由を書く（なぜなら～） ★★★：今後のことを書く（これからは～）	「本当の友だちになるには、どんなことが大切だと思う?」 考えを書けたら★1つ、理由がかけたら★2つ、今後のことを書けたら★3つです。3つ書ける人はがんばって書いてみてね。	過去の友人関係の開示は求めない。一般的な例や物語に引き寄せた考えでもよい。
47-50 3分	終末 考えを分かち合う	2～3名が振り返りを一文で共有する。ほかの生徒は共通点や違いを聞く。	教師は生徒の異なる捉えを受け止め、今日の問いを今後も考え続けられる形で閉じる。	「本当の友だち」の条件を教師が一つに定めない。

10. 中心発問に対する予想反応と教師の問い返し

立場	価値のある見方	教師の問い返し
場面 6：金を渡し、村人が笑顔で近づいた	受け取り、感謝し、近づくことも関係の入口。贈り物は必ずしも悪くない。	笑顔で近づいたことは関係の入口にもなり得る。一方、笑顔の理由は決めつけられない。 問い返し：その笑顔は何に向けられていた？ 金をもらうことと友だちになることは同じ？
場面 10：アカが子どもを救った	危険を引き受け、見返りを求めることなく相手の命を守った。アカの人柄が行動で表れた。	アカの行動を見て、村人たちのアカへの気持ちは変わっただろうか。救う行動だけで関係が成立したと言える？
場面 14：おばあさんが最初に手伝った	これまではアカから村人たちへ働き掛けていたが、ここでは初めて村人の側からアカを支えようとする行動が生まれた。一方向だった関係が、互いに支え合う関係へ変わり始めた。	おばあさんが動き出した理由を複数考える。村人の側からの働き掛けは、場面 6 の笑顔とどう違う？
場面 15：村人たちと日常を共にするようになった	助ける側と助けられる側が固定されず、互いに教え合ったり遊び合ったりする、対等で日常的な関係へと深まった。	助け合い、教え合い、遊ぶ日常は、場面 6・10・14 からどのようにつながっている？

教師が避けたい収束

- 「物より心が大切」という結論だけで終える。贈り物も、動機や渡し方によっては友情を表すものや、関係が始まるきっかけになり得る。
- 「相手を助ければ友達になれる」と因果関係を単純化する。相手がどう受け止め、応じるかという自由や、関係を育むために必要な時間を見落とさない。
- アオの自己犠牲を、友情の理想として無条件に評価する。本時では自己犠牲の是非に論点を広げず、アカと村人たちとの関係が相互的なものへ変化する過程に焦点を当てる。
- 生徒が語った実体験をよい・悪いと評価したり、友達の数や関係の親密さを基準に、その生徒の人間関係を価値づけたりする。

11. 板書計画

板書は導入の「友だちってどんな関係？」を左に残し、場面 6 の金と笑顔をめぐる異なる見方を並べる。中央に場面 10・14・15 の行動と関係の変化をつなぎ、右に中心発問と、生徒が考えた「本当の友だちになるために大切なこと」を置く。結論を先に書かず、生徒の言葉と根拠を各場面に結び付ける。

場面 6 金・笑顔	場面 10 救う	場面 14 村人も手伝う	場面 15 共に暮らす	導入の友だち観と場面 6 の見方を、物語の後半と比べる。 最後に自己への問いを置く。
アカ → 村人 村人 → アカ (金が目的?)	アカ → 村人 見返りなし	アカ ⇄ 村人 村人からも行動	アカ ⇄ 村人 助け・学び・遊び	

12. 評価の見取り

評価の原則 本時の結論を採点しない。単時の発言・選択変更・記述は見取り資料とし、年間または学期の大きくくりでのまとまりの中で、個人内の成長を記述的に捉える。

見取りの視点	見取りたい学習状況	具体的な証拠
多面的・多角的な見方	複数の場面や人物の立場を比べ、動機・見返り・相互性・時間など、判断の観点を増やしている。	場面選択の理由／問い返しへの応答／他者の考えを受けた書き換え
自分との関わり	友情や信頼を自分にも関わる問いとして捉え、本当の友だちになるために大切だと思うことを考えている。	導入の発言やメモと、終末の記述／大切だと思うことを自分の言葉で表した記述
対話への関わり	自分と異なる考えを理解しようとしたり、聞く中で考えを深めたりしている。	発言だけでなく、聞く姿・メモ・選択変更・短文も含む

記述例（教師用）

当初は場面 6 で村人たちが笑顔で近づいたので友だちになれたと考えたが、ほかの生徒の「金がなくても近づいてもらうか」という見方を受け、場面 10・14・15 の行動も比べた。贈り物は関係のきっかけになり得る一方、互いの行動や日常の関わりを通して信頼が深まると、自分の理由を広げていた。

13. ICT 活用（朗読音声と挿絵提示）

- 目的：朗読の声と言葉、挿絵の表情・距離・色彩を結び付け、物語の世界と登場人物の関係の変化を具体的にイメージできるようにする。
- 音声：Scene 4 でアカがシロに会う場面から Scene 15 までを 1.25 倍速で再生し、約 10 分に収める。授業前に開始位置・終了位置・音量を確認する。
- 画面：ディスプレイとスピーカーを接続すると、音声の進行に合わせて Scene 4～15 の挿絵が自動的に切り替わる。複数場面を一覧にせず、その場面に集中できるようにする。
- 教師の働き：再生前に接続・音量・自動切替を確認する。朗読中の解説や発問は最小限にし、生徒が絵と言葉を結び付ける時間を確保する。
- 参加保障：聞き取りに支援が必要な生徒には本文抜粋を用意し、座席・画面の見え方・音量を調整する。
- 代替：音声は事前に端末へ保存し、挿絵は印刷版も用意する。機器不調時は教師の範読と印刷した挿絵で同じ流れを行う。

提示の要点 朗読と挿絵で物語を味わった後、場面 6 の金と笑顔についての判断を揺さぶり、場面 10・14・15 を比較する中心発問につなげる。

14. 学習参加への配慮

- 場面を画像・短い本文・教師の口頭説明の三つで提示し、読字負担を下げる。
- 発言前に必ず個人思考の時間を取り、場面カードの提示・指差し・短文でも意思表示できるようにする。
- 場面 6・10・14・15 のいずれにも、関係の始まりや変化、深まりを見いだせる。生徒が複数の場面を根拠にして考えることを認め、特定の場面を正解として扱わない。
- 友人関係のつらい経験や孤立の開示を求めない。個別の生徒同士を例に出さない。
- 日本語での表現に支援が必要な場合は、「私は場面__で関係が変わったと思う。なぜなら__。場面__と比べると__だから」の文型を用意する。

15. 授業直前チェック

□ Scene 4～15 の音声 が 1.25 倍速で約 10 分になることを確認した	□ 場面 6・10・14・15 の叙述を全員が参照できる
□ ディスプレイとスピーカーを接続し、挿絵の自動切替を確認した	□ 導入の友だち観、場面 6 の判断、中心発問、自己への問いを対応させて振り返りを見取れる

16. 参考資料

文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編』、内容項目 B「友情、信頼」（pp.40-41）、評価（pp.112-114）。2025 年 3 月 24 日掲載版を 2026 年 8 月 17 日確認。

https://www.mext.go.jp/content/20250324-mxt_kyoiku01-100002608_01.pdf

教材：Taku Izushi『アカとアオ』日本語版 Scene 1-15（授業では特に Scene 6・10・14・15 を使用）。

※「アカとアオ」事前学習用ウェブサイトでの操作手順（所要時間：約 15 分）

<https://storybloom-talkgrow.lovable.app/>

- ① 「Story 物語を読む」を選ぶ。
- ② 「アカとアオ（漢字＋ひらがなで読む）」を選ぶ。
- ③ 「場面ごと | 全文」タブから「全文」を選ぶ。
- ④ 再生ボタンを押して物語を聴く。または、表示された文章を読む。

「アカとアオ」ワークシート

年 組 氏名

問1：アカと村人たちの関係は、どの場面で、どのように変わり、深まった？

自分が考える各場面のアカと村人の「友だちレベル」を〇〇%で表してみましょう。

正解は一つではありません。どうしてそう思ったかについて話し合ってみましょう。

友だちレベル (0～100%)	場面 番号	場面タイトル	簡単な状況
%	6	村人たちの笑顔	村人たちが、金を持つアカに笑顔で近づき、手を差し出した。
%	10	村人をすくうために	アカが危険な濁流の中で、村人の子どもたちを助けた。
%	14	力を合わせて	アカが村を直すために働き、おばあさんをきっかけに村人も手伝い始めた。
%	15	本当の友だち	アカと村人が助け合い、教え合い、いっしょに遊ぶようになった。

問2：本当の友だちになるには、どんなことが大切だと思う？

★☆☆：考えを一つ書きましょう。 「私は～」

★★☆：その理由を書きましょう。 「なぜなら～」

★★★：今後のことについて書きましょう。 「これからは～」


